

第 25 回:ラクゴ・ザ・フューチャー二周年記念号

「こんにちは」

「お、おまはんかいな、こっちはいり。
ま、あがんはなれ。ん？　なんや目が
赤いやないか。鼻水も垂らして、どな
いしたんや」

「じんべはん、わたい、あれでんねん」

「あれ？　あれではわからんがな。
はっきり言いなはれ」

「ほら、あれ……何ていうか、あの……
何やら言いまっしゃろ。何とか症て」

「何とか症？　何症やねん」

「えーとね、えーとね……ここまで出
かかってまんねんけどなあ……覗いた
ら見えまへんか」

「見えるかい、そんなもん。はよ、思い
出せ」

「うーん……うーん……あ、そうそう、
笑い話」

「笑い話？」

「笑い話症……ちやいまんなあ。笑い
話の最後にたいがいついてる言葉ね」

「笑い話の最後についてる？　おまえ

RAKUGO
THE
FUTUREJAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 25 回:ラクゴ・ザ・フューチャー二周年記念号

の言うてること、わからんわ。たとえば、『隣の空き地に囲いができたで』『へー』……おまえの言いたいのは、『へー症』か?」

「あほなことをこれ。そんな特殊な笑い話を例にしたらあきまへんわ。もっと、普通のやつ」

「普通やと思うけどなあ。ほなら『この帽子ドイツんだ』『オランダ』……おまえの言いたいのは、『オランダ症』か」

「そういうめずらしいやつやのうて、もっとありきたりのやつおまへんか」

「ありきたりやと思うけどな。ほな『おイモがないときにおイモを食べたくなったら、お尻の穴で空気を吸えばいいよ』『どうして?』『だって、口からおイモを食べたら、お尻から空気が出るでしょ。だったら、お尻で空気を吸えば、口からおイモが出るはずだもん』『ぎゃふん!』」

「そいつやー、そいつや!」

「何や、仇に巡りおうたみたいに……

どないしたんや」

「それですわ。わたいの病気。ぎゃふん症ですわ」

「それも言うなら、花粉症やろ」

「お医者先生の、ぎゃふん症や言いましたで」

「おまえの聞き違いや。ほんまは花粉症言うねん」

「そうでっか……? ぎゃふん症やと思うけどな。ところで、じんべはん、笑い話の最後に、何で『ぎゃふん』て言いまんねん」

「え?」

「いや、笑い話の最後に、何で『ぎゃふん』て言いまんねん、てたずねてまんねん」

「そら……おまえ……決まっとるやないか」

「どない決まってまんねん」

「また今度教えたるわ」

「そんないけずなこと言わんと、今、教えとくなはれ」

「あいな……なんで笑い話の最後にぎゃふんというか、と言うたらやな……もとは『ぎゃふん』やなかった。昔は、これを『ぎょふん』と言うたんや」

「ぎょふん?」

「魚粉と書いて、ぎょふん、と読む。魚の粉のことやな。……これでわかったやろ。さ、帰り」

「帰り、て、あんた。なんで笑い話の最後に魚の粉のこと言いまんねん」

「おまえの疑いももっともやが、その話はまた今度……」

「今、ききたいんです。教えとくなはれ」

「うるさいやっちゃな。魚いうのは、だいたい生でそのまま食べるのが一番うまいんや。次が焼き魚、その次が煮魚や。手をかけるたびにまずうなっていく。粉にして食べるやなんて、愚の骨頂や。つまり、そんなあほなことをするやつはおらんという意味で、『ぎょふん』すなわち『そんなあほな』や」

「はあはあなるほど」

「信用したか」

「まさか」

「やっぱりな」

「でも、ようやくその花粉症も峠を越して、ほっとしてまんねん。これから梅雨で、雨の季節でっさかい、花粉も下火になりますわ」

「雨か。あんまりどしゃぶりいうのも困るが、雨降りちゅうのはなかなか風情があってええもんや」

「何言うてまんねん。雨は体に毒やそうでっせ」

「そうか? 春雨じゃ、濡れてゆこう、言うた人もおるけどな」

「そいつはあほですわ。雨に濡れたら病気になりまっせ」

「ちょっとぐらいやったらだいじょうぶやろ。酔うたときに、小雨の中を歩くのはひんやりとして心地のえかもんやで」

「あきまへん。証拠がおますわ」

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 25 回:ラクゴ・ザ・フューチャー二周年記念号

「どんな証拠や」
「歌です。雨は病気のもとや、ゆう歌がいっぱいおまんがな。『雨が病んだら……』とか『外は冬の雨、まだ病まぬ……』とか『病み上がりの虹は……』とか……」
「よういわんわ。そら、雨が病むんやのうて、雨が止むやろ」
「口で言うてもわかりまへんな、これ。ほんまゆうたら、『雨に濡れても』とか『雨に歌えば』とか、雨が当たっても病気になるってない歌もあるから、おかしいな、とは思ってたんですけど……。ほれ、あのガイルゆう外人が雨に打たれて修行してるゆう歌もありまっしゃろ」
「な、なんや、それ？」
「知りまへんか、『雨に濡れながらたたずむ人、ガイル』……」
「ちゃうわ、それは。それはこうこうや」
「こうこうですか？ ほな、わたしは今まで聞き間違いしてましたんか」
「言うたらなんやけどな、おまはん、

ちょっと聞き間違いが多すぎるんとちゃうか。あほなまちがいで済んでるうちはええけど、そのうち大きな間違いをしでかすで。気づけや」
「歌で思い出しましたけど、外国の歌にはけったいな歌詞のもんがありまん」
「おまえの話はあちこち飛ぶな」
「すんまへん、今回、ネタがばらばらでんねん。で、喫茶店にいてましたら、有線で懐かしい歌がかかってまんねんわ。ほれ……あの……外人の四人組が歌とる、有閑マダムがどうたらこうたらそう歌ありまっしゃろ」
「外人四人組で……有閑マダム……？ おまえ、それ、また、なんぞの聞き間違いとちゃうか」
「いや、たしかにそういう歌詞でした。めちゃめっちゃヒットした……ほれ……『有閑ざーんす、有閑ざーんす』ゆう……」
「やっぱり聞き間違いや。それは、アバのな」

「阿波？」
「阿波やない、アバ。そういうグループ名や。その『ダンシング・クイーン』ゆう曲や。世界的に大ヒットした曲の歌詞ぐらい、ちゃんと覚えとけ」
「そうでっか。ほんで、ほんまは何て歌てまんねん」
「え？」
「いや、有閑ざーんす、ゆうのは聞き間違いなんでっしゃろ？ ほな、ほんまはどういう歌詞でんねん」
「それはやな……また今度教えたる」
「またやまたや。今、教えとくなはれ」
「どうでもええんやないか、そんな歌詞ぐらい」
「あんた、今、歌詞ぐらいちゃんと覚えとけ、言いましたがな」
「そやったかいな。あれはやな……たしかに有閑マダムが『○○ざんす』ゆうてるように聞こえるが、ちょっとちがうんや。あれは、有閑やのうて、夕刊。新聞配達のおっちゃんが、『夕刊

だーす、夕刊だーす』ゆうて配って歩いてはる、という歌詞や」
「はあはあなるほど」
「信用したか」
「まさか」
「やっぱりな」
「そういえば、こないだ童謡のCD聞いたって、びっくりしたことがおまんねん。わたいら、都会に住んでるもんには『そんなあほな』としか思えんようなことが、まだまだ田舎ではありまんねんな」
「どうでもかえけど、ほんまにおまえの話はようあちこち飛ぶな。作者に言うとか。もうちょっと一貫性のあるネタで書くように、言うて。で、何のこっちゃねん」
「器物はみな、千年の齢をへると付喪神ゆう妖怪になる、言いまっけど、ほんまですな。田舎のほうでは、都会から払い下げになったバスとかが走ってますやろ。あれ、皆、妖怪らしいですな」

RAKUGO
THE
FUTURE

JAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 25 回:ラクゴ・ザ・フューチャー二周年記念号

「は？ 何言うとるねん」
「童謡にありまんねん、『田舎のバス
は、おぼろ車……』ゆうて」
「あほらしいて、コメントする気にも
なれんわ。それも言うなら『田舎のバ
スはおんぼろ車……』やろ」
「あ？ そうですのん？ これもまた、
聞き間違いですわ。しゃあけど、いい
わけするように聞こえまっけど、わた
いばかりが悪いんとちゃいまっせ。
歌詞ゆうのは、歌手がじょうずやっ
たらちゃんと聞き取れまんねん。わたい
が聞き間違いするゆうのは、要する
に、歌手がへたくそなんですわ」
「えらいこというた。そのとおりや。最
近の歌手は発音がなっていないやつがよ
うけおる。たとえば、○○○○とか○
○○○○とか○○○○○○とか○○○
○○○○とか○○○○○○○○とか○
○○○○○○○○とか○○○○○○○
○○○とか○○○○○○○○○○と
か……」

「そんな長い名前のやつ、おるやろか」
「おる」
「ま、さからわんところ。でも、ガイナッ
クスのアニメの主題歌の歌詞ゆうのは、
どれも聞き取りやすいですわな、なん
や、べんちゃら言うようすけど」
「そやな、それはわしも認める。ガイ
ナックスのアニメの主題歌歌とる歌手
は、みんな発音がしっかりしとるさか
い、歌詞もきちんと伝わるんや、なん
や、べんちゃら言うところようやけど」
「たとえば、あのエヴァンゲリオンゆ
うの、おますわな。あの主題歌の『暗
黒な変死のせいで』ゆうのは、なかな
かよろしな」
「いえてる。『暗黒な変死のせいで』は
最高やな」
「よかったよかった」
「よかったよかった」